
Alive Beats!

不幸男

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Alive Beats!

【Nコード】

N6827X

【作者名】

不幸男

【あらすじ】

おう、日向だ。今回の話は13話Cパートのちよい前から始まるぜ。もし音無達が生まれ変わって（フジつばに、じゃないぞ！）違う出会いをしていたら、という内容だ。正直、何番煎じかわからないけど一生懸命、頑張るので応援よろしく！でもすさまじい原作ブレイクとキャラ崩壊が起こるから気をつけてな。音無のキャラが崩壊していくのに注目だ！！

序章 Prologue (前書き)

文法ミス、誤字脱字、などなどお見苦しい点が多々あるかもしれませんが、せんが大目に見てくれると嬉しいです。

感想等は受け付けておりますので、書いてもらえるとうれしいです。

原作様、原作が好きな皆さん、本当にすみませんでした。

序章 Prologue

自分の小さい頃の記憶がある人は少ない。

3歳の頃や、それ以前の頃の記憶だ。

母親のお腹の中の頃の記憶がある人もいるらしい。

しかしそれは所詮、自分という存在ができてからの記憶だ。

もっと前の記憶を持っている人は果たして本当にいるのだろうか？

例えば前世の記憶。

自分じゃない自分の記憶をもつ、それはどういう気分なのだろうか？

死んだ時の記憶もあるのだろうか？

そして・・・

死んだ後の記憶もあるのだろうか？

俺には自分じゃない時の記憶はない。

しかし前世のような記憶はある。

前世で死んだ後、どこかわからないところにいた記憶すらある。

漠然ではあるが確かにこの頭の中にあるのだ。

そしてそれは全て自分であるようなのだ。

「どうしたの？お兄ちゃん。頭でも痛いのか？それとも電車で酔った？」

心配そうな顔で俺の顔を覗きこんでいる女の子は妹の初音だ。

さっきまでスヤスヤと寝息をたてていたようだったがいつのまにか起きていた。

この初音は記憶の中とは違って入院はしていない。

体は弱い方だがいたって健康だ。

「ああ。大丈夫だ。お前こそ体の具合はどうだ？」

「うん、今は大分いいよ。お兄ちゃんこそ本当に大丈夫？」

「だから大丈夫だって」

そう答えると安心したのかしばらくしてまた小さな寝息をたて始めた。

そもそも何故俺たちが電車に乗っているかと言うと親の都合で引越すことになったからだ。

こういうことは前にも何回があった。

うちの親は俗にいう転勤族ってやつだ。

転校。

初めて転校した時はやはり悲しかったし新しい場所への不安もあった。

だが今となっては何回か経験しただけなのに慣れてしまっている自分がいる。

人間の適応能力の高さには本当驚かされるよ。

いや人間じゃなくて俺の……かな。

そんなことを考えていると電車はいつのまにか目的の駅についていた。

序章 Prologue (後書き)

まだプロローグなんで面白くないですねwww

これから頑張ります。

第一章〜Encounter（前書き）

第一章です。

では…

第一章　Encounter

寝ている初音を起こすのは忍びなかったがこのままにしておくことも出来ないので起こす。

寝ぼけた初音が「んゝお兄ちゃん、朝御飯は？」と言ったが俺はいつまでも優しいお兄ちゃんだったたので聞かなかったことにした。

まさに兄の鏡である。

鏡兄^{きようにい}である。

違うけど。

寝ぼけたままの初音の手を引き、駅から出る。

駅の回りはなんというか…想像以上に都会だった。コンクリートに囲まれているせいか春なのに初夏のような暑さだ。

前にいた所はまだ長袖が多かったがこちらは半袖の比率の方が圧倒的に高いようだ。

それにしても都会すぎる…。

事前に調べた感じではもう少し田舎だと思っていたため面食らってしまった。

初音も予想外の都会っぷりに目をパチクリさせている。

「あっ！」

しばらくこのコンクリートジャングル見渡していた初音が急に声を上げた。

不意を突かれた俺はビクツとなって若干、宙に浮いてしまうという恥ずかしい行動をとってしまった。

なぜならさっきまで寝てた奴の声とは思えないほどの大きさだったからだ。

断じて俺が怖がりというわけではない！！！！

そこは誤解しないでほしい！！！！

「お兄ちゃん…業者さんから荷物届く時間まで、まだ時間あるよね？」

「んーそうだな。あると言えばあるな。それがどうした？」

「じゃあ…1時間後またここで集合ねっ！」

と初音は用件だけ言つと走り去ってしまった。

しかも俺の「おい、ちょ、待っ…」という言葉が聞こえるはずもないスピードで、だ。

なんつー速さだよ…

初音を呼び止めるのを諦めて何処へ向かったのか確かめようと初音が走り去った方をみる。

そこには一際大きな看板で

【animate】

と書いてあった。

初音は小さい頃、俺の漫画を勝手にあさって読んでいたためにマンガが大好きな女の子になってしまった。

そのせいでか、ジャンルを問わずありとあらゆるマンガを読んでいたようだ。

最近はアニメや俗にいうギャルゲ、さらにはエロゲと言うジャンルにも手を出しているらしい。

妹の趣味にとにかく口を出すウザイお兄ちゃんにはなりたくなかった。なのでなにも言わなかった。

むしろ相談されて妹の問題を解決していく優しいお兄ちゃんでありたいと思っている。

しかしなにも言わないからといってリビングでエロゲするのはやめてほしい。

とりあえず初音が何処へ行ったのか確認出来たので、あと1時間何をするか歩きながら考えることにした。

結局、その辺にあったCDショップや服屋をブラブラ回って元の駅前に戻ってきてしまった。

約束の時間までまだ30分を残してしまふ残念な結果だった。

1時間ぴったりでここに戻ってきてても何も商品はないのだが…。

しょうがないからもう1周して戻ってこよう。

それでちょうどいい時間だろう。

そう思ってまた来た方向に足を向け歩き始めた。

その時。

正にまた1周するのだるいな、何てことを考えていた時だった。

不意に鼻歌が聞こえてきた。

いやただの鼻歌なら誰だって歌うだろう。

これだけの人がいるのだ、一人くらい鼻歌を歌ってもおかしくない。

問題は曲。

曲なんだ。

別に流行りの曲ならかまわない。

俺だって一般人くらいの音楽の知識はある。

ただ普通の曲なら

ああ、あの曲歌ってるなあ…

少年が神話になってるなあ…

カラオケのランキングじゃ絶対上位に入ってるもんな…

で終わりだったろう。

しかし歌っていた歌は…

どこかで聞いたことがあるような歌だった。

いや、どこかで聞いたことがある、というレベルを超えて、絶対に聞いたことがある歌だった。

そしてその歌を聞いた瞬間…

赤い髪の子がアコギをもって体育館のステージ上で歌っている姿と…

小柄な白い髪の…まるで天使のような少女の姿が頭に浮かんだ。

俺は勢いよく振り向く。

鼻歌を歌っていた人物を探すために…。

あるのは人混み、人混み、人混み。

探す。

一体誰がこの歌を歌っているのか。

答えはすぐに解った。

俺の右斜め前。

帽子を深くかぶっているため顔は見えないが白い髪の少女がいた。

さっき頭に浮かんだ少女かは解らない。

解らない、が…

俺は話しかけずにはいられなかった。

話しかけようと決意した瞬間、少女は今まで寄っ掛かっていた壁から背を離し、俺がいる方とは逆に歩き始める。

「ちょ、ちよっと待ってくれ!」

俺は彼女の手を掴んで呼び止めた。

彼女がこちらに振り返る。

やはりさっき頭に浮かんだ少女だった。

彼女は一瞬驚いた顔をしたが、すぐに真顔に戻って、

「なに？」

と小さく首を傾げた。

「あのっ…えー、あれだ、そのー…」

迷う。

何て言っていていいか迷う。

いきなり出会った少女に対し何て言えばいいのかなんて学校じゃ習わないし、第一俺はこういうのが苦手なんだ。

って言うかなんで話しかけたんだ？

こっちは前世？の記憶みたいなので知ってるだけで、いや知ってるっていうか顔だけ知ってて、むこうはこっちはこのことは1mmもしらないんだぞ？

しかも俺は今日越してきたばかり…ってかまだ家に着いてないからまだ越してきたことにもなっていないのか？

……じゃなくて！

引っ越しの定義とかはどうでもいいんだ！

これを引っ越した、と思う奴には引っ越したということであり、引っ越してないと思う奴には引っ越してないんだ、的な考えでいいんだ。

そういうのがかっこいいのは中学生までだ!!

いや、違う!!

今はそんなことはどうでもいい!!

今大切なのはこっちは知ってるけどむこうは知らない、という少女
に対して何を第一声にすればいいかであって…

解らない解らない解らない
解らない解らない解らない
解らない解らない解らない

「あ、あの…僕たちどこかで会ったことありませんか？」

……………。

しまったあああ！

何か昔によくあるナンパみたいになってしまったあああ！

「ないわ」

即答！？

人生初？のナンパ？みたいな言葉を発してしまい恥ずかしさのあま

り頭を抱えている俺に対して追い討ちをかける彼女。

「そうですね…。すいませんでした。」

とりあえず謝ることにした。

とりあえず謝つとけば万事解決。

「他に用はあるの？」

「いえ、ありません。本当にすいませんでした。」

俺の言葉を聞くと彼女はスタスタと歩き去ってしまった。

俺は初音が来るまで立ち直ることができなかった。

第一章〜Encounter（後書き）

ここまで読んでくれてありがとうございます。

うん。

まだまだですねwww

頑張ります！

第二章↳unpack↳(前書き)

第二章です。

頑張れ、音無くん！

もうキャラ崩壊が始まっているぞ！！

第二章↳unpack↳

到着して早々、初音は

「ん？お兄ちゃん、どうしたの？元氣ないねえ。こんなに素晴らし
い日にしょくれた顔してると罰が当たっちゃうよ！」

と上機嫌で俺に言ってきた。

予定してた時間を30分も遅れて来た初音の手には大量の紙袋があ
った。

いや実は大漁だった。

俺が人生最大の汚点（とは言っても16年程度しか生きてないが…）
を犯している間にコイツはとてもしい商品たちと出逢えたようだ。

「ああ…ただ…自分の愚行を悔いているだけだよ、我が妹…」

「うわ、お兄ちゃんが中二病になっちゃった！元氣だしてー。いつ
ものお兄ちゃんに戻ってー」

「ダメだ…鬱だ…私は貝になりたい…」

完全にダークサイドに落ちていく俺。

よし、俺は貝になるんだ。

そして大きな真珠を作って大金持ちになるんだ。

「辛いこの後には必ずいいことがきつと待ってるよ」

励ましてくれる初音。

初音…お前はなんていい子なんだ!!

「…そうだよな!きつといいことがある!そう信じて生きていくしかないんだよな!よし頑張って生きていくぞ」

めちやくちゃ立ち直りの早い俺がそこにはいた。

そうだよ。

きつと生きていたら楽しいことがたくさんあるさっ!!

「じゃあとりあえずバス停に向かうか!そろそろ行かないと業者さん、来ちゃうし」

「そうだね。それじゃあ、はい」

……?

なぜ俺に紙袋を渡す?

まさか俺へのプレゼントなの、

「気をつけて運んでね。中身はハルヒのマグカップだから!」

ですよ〜

荷物運び以外考えられないですね。

今日、学んだ教訓は考えて行動することと不幸は連鎖するから注意した方がいい、ということだった。

家は駅からバスに揺られて20分のところにある。

ちなみにバスが出発してから10分でコンクリートジャングルをぬけ、急に田舎に入った。

駅を中心に栄えていたようで駅周辺をぬけてしまえば自然豊かな風景が広がるということのようだ。

バス停からさらに5分歩いてようやく新しい我が家についた。

家は普通の2階建ての家。

家の中は予想以上に広かった。

両親は車でこちらへ向かっていて夜にはつくとのこと。

業者から一通りの荷物を受け取り、家具などを家の中に配置する。

リビングのほうが大体片付いたら遅めの昼飯を用意した。

初音はオムライスに自分の名前が書いていない、とブーブーと文句をいつてきたのでケチャップで初音と書いてやった。

勢い余ってミクと書いてしまったがなんか喜んでたので優しいお兄ちゃん的には満足です。

自分の部屋に荷物を運び、片付けていたらもう夜になっていた。

疲れたので残りの段ボールを明日に回し、ベッドになっところがる。

ちなみに明日から新たな高校で新たな高校生活が始まる。

明日からが新しい学年の始まり、つまりクラス替えがあっているのが転校生としては非常に楽だ。

またいつものように目立たないポジションを獲得しよう。

いつも通りの傍観者ポジションだ。

またいつ転校するかわからないのでそのポジションが何かと楽なのだ。

俺はまだ開けてない段ボールの山をみて今日あった少女のことを思い出してみた。

小柄で白い髪の少女。

まるで天使のような少女だった。

可愛いらしい娘だったな…。

もしかして転校先にいたりしてな…。

いやいやそんなマンガみたいなことはさすがにないだろう。

あつたとしても出来すぎでベタすぎだ。

そんな気持ちとは裏腹に俺は心のどこかで確信していた。

きっとまたあの少女と出会っただろうと…。

第二章↳unpack↳(後書き)

ここまで読んでくれてありがとうございます。

音無くんのキャラが見事に崩壊しちゃいましたね…

本当にすいません。

第三章〜Morning call〜（前書き）

第三章です。

けしからんですねwww

第三章　Morning call

俺は静かに目を開ける。

そこには行ったこともない学園が広がっていた。

行ったことはないが記憶にはある場所だった。

俺は目を閉じる。

再び目を開けた時には校長室が広がっていた。

いや正しくは校長室を改装した作戦本部のような場所だった。

そして俺の目の前に多くの人間が現れては消えていく。

みんな俺と同じ制服を着ていた。

そして…

最後にあの白髪の小柄な少女が現れて…

俺は目覚めた。

カーテンの隙間から指す光は見事に俺の顔面を焼いていた。

起き上がりつつ時計を確認。

まだ少し早い時間だった。

昨日残っていた段ボールの山の解体にかかる。

粗方、終わった所で下から親が朝飯が出来たことを告げた。

親は昨日、俺が寝ている時に着いたらしい。

俺はここに来る前からの習慣である「妹起こし」を決行するため初音の部屋に急ぐ。

っていつか初音的な考え方をするなら初音が

「もう！お兄ちゃん！いい加減に起きないと遅刻しちゃうよ！先にいっちゃうからね！」

と起こしにくるのがお約束じゃねえのか？

いやいや俺は初音に起こしてほしかったなあ、なんて考えてるわけじゃないんだぜ？

ただ普通はだな、うん。

そういう展開を読者が期待してるんじゃないだろうか、と考えた結果、初音が起こしに来た方がどっちかと言うといいんじゃないかなあと思っただけだ。

それだけなんだよ、うん。

そんなことを考えながら初音の部屋のドアを開けた。

「おい、初音。いい加減にしないと遅刻するぞ、早く……」

そこまで言って俺は絶句した。

まさに絶句した。

さっきまで考えていたことなんてそりゃー吹っ飛ぶくらいに驚いたもんだ。

初音は寝ていた。

それはいい。

しかし問題は寝ている姿だ。

初音は可愛いピンクのパジャマを着ていた。

そのピンクのパジャマは若干、下からめくり上がっており、少し・
・いや3分の1くらいブラジャーが見えて、いた。

小さくて慎ましいながらもしっかりと主張を忘れない初音の胸は初音が寝息をたてるたびに上下運動し、まさにその姿は………

……

っておい！何、実の妹相手にラブコメ的な展開になってるんだああ！

イカンイカン頭をひやせ、音無結弦。

ある意味読者が期待していた展開になってしまったがここで過ちを犯してしまうわけにはいかない。

落ち着くんだ。

……よし。

大丈夫、もう大丈夫だ。

「は、早くしないと遅刻ぞ、ほおら。」

そういつて初音を揺さぶりにかかった。

揺さぶった瞬間、俺の視界も一緒に揺れた。

突然、初音が俺の首を両手で抱くようにして引き寄せたからだ。

俺は抗えず、初音のベッドにそのまま倒れこんでしまう。

まるでずっと添い寝していたような体制になってしまった。

しかも鼻先3cmの距離。

な、なんでこいつ、こんなにいい匂いすんだ？

…じゃなくて！

これなんてエロゲ！？

おかしいだろ！

今まで起こしに行ったときこんなことなかったら？

絶対おかしいて…

「結弦！なにやってるの？早く初音を起こして降りてきなさい！」

ギツと床を踏む音がする。

きつと母親が階段に足をかけた音だ。

まずい。

こんなとこ母親に見られたら…

考えただけで恐ろしい！

「お、起きろ！初音！早く、早くはなしてくれえ！」

離れようとするたびに強く絞まっていく。

まるで蛇の巻き付きのようだ。

まずい。

非常にまずい。

階段の段数は25段。

あそこから約30秒以内でこの初音の部屋に辿り着く。

この30秒以内に初音を起こし乱れた服装を直さなければならない。
クソッ・・・どうすれば！

どうすればどうすればどうすればどうすればどうすれば

…そうだ！もうこれしかない！

もうこれが無理なら打ち切り終了、ゲームオーバーだ。

「おい、初音！お前深夜アニメ録画忘れてるぞ！早くしないと…」

「しまったあ！何だっけ？けいおん！かな？いや日常かな？」

走り去っていく初音。

勿論、廊下には母親がいるわけで。

そして初音は全力疾走なわけで。

廊下はそこまで広くないわけで。

初音は寝ぼけているわけで。

避けれるほど目覚めてないわけで。

予想通りの衝突音が聞こえ、初音が半狂乱で母親に訴える声が聞こえてきた。

「いったーい！ってお母さんどいて！早くしないとクラナドが！私の人生があー！！」

「何、寝惚けてんの！！朝御飯よ！早く支度して降りてきなさい！」

初音が部屋に戻ってくる前にリビングに避難しよう。

初音への言い訳を考えながら下へとおりた。

第三章〜Morning call〜（後書き）

ここまで読んでくれてありがとうございます。

うーん…音無くん、ラッキースケベですな

第四章〜Crazy students〜(前書き)

第四章です。

ちなみに初音の歳は音無くんの1コマの設定です。

第四章　Crazy students

朝食を取って（その間ずっと初音は文句を言ってきた）、家を出た。

学校はバスに乗って20分ほどでつく。

森や川に囲まれた学校だ。

俺は今日からその2年に、初音は1年になる。

バス停は家からわりと近いのですぐバス停についた。

着くと同時にバスがくる。

幸先がいいな。

バスはスクールバスなので一般の人はあまり乗らないようだ。

中には学校の生徒ばかりだった。

適当に空いてる場所に座る。

初音は俺の後ろに座った。

バスが次のバス停についた時、初音が不意に袖を引っ張ってきた。

「ねえお兄ちゃん、あの人肉うどん食べながらバスに乗ってきたよ

「？」

「はぁ？何を馬鹿なことを…」

大体、肉うどん食べながらのってたら急ブレーキとかのとき、汁が前の人にドバーとかかるだろうが、ドバーと。

と長々と言おうとした時だった。

頬に何か熱い汁のようなものがあたった。

ん？

なんだ…

うお？

甘いぞこれ！！

「おお、すまん。今日は欲張って汁を多目についでもらったのだ。」

そこには肉うどんを食べながら謝罪してくる巨漢がいた。

嫌、本当に、漢おっって感じだった。

その光景は正に衝撃的だった。

俺にも肉うどんの妖精が見えたのだ。

「あいつは松下五段だ」

前の青い髪の男が話しかけてきた。

正直、名前なんかより何故肉うどん所持でこのバスに乗り込んできたのか、何故生徒だけではなく運転手まで、「いつものことだ。気にするな、少年。」的な目でこちらを見てるのか、などの疑問に答えてほしかったのだが。

「お前、転校生？このバスでは見ない顔だから転校生だろ？俺、日向ってんだ。よろしく」

手を差しのべてきたのでとりあえず握手。

別に俺の右手には幻想をぶち殺す能力など備わっていないため、相手が魔術師でも迷惑はかけないだろう。

握手したところでバスが停車した。

ドアが開く音がする。

と、同時に袖がすごい力で引かれる。

「お、お兄ちゃん、あ、あの人、あの眼鏡の人！上半身、裸だよ！しかも顔に似合わずマッチョだよ！」

「何、馬鹿なことやってんだ？そんな人いるわけ…」

早口で状況を伝えてきた初音に対して疑いながらも先程の肉うどん

の妖精、松下五段（だったかな？）の件もあるのでドアの方へ目を向ける。

いた。

普通にいた。

しかも入り口でポーズをとっていた。

しかしバスはそんなことお構い無しに走り始める。

筋肉眼鏡は発車時少しよろけ、そのあとは何くわね顔をして服を着、空いてる席に座った。

ダメだ…

肉うどんだけでも許容範囲外だったのにこんなの見せられたら…

「あいつは高松。眼鏡かけてるけどアホだ。」

ええええ！？

あの筋肉についての説明なしかよ？

ちよつと待て。

さすがにあれだけ筋肉アピールしてたんだからなんか触れてあげようよ…。

しかもあの顔でアホとか…

顔負けだよ！！

字の通りの意味で。

そんなことを考えてたらまたバスが停まった。

クソッ…

こうなつたらなんでもこい！

許容範囲外だろうが、なんだろうがもう驚かない！

ありのままを受け止めてやる！

俺は順応性は高い方だと自負している。

静かにバスのドアが開く。

そこに立っていたのは金髪にヘッドバンドで目元を隠した外国人だった。

つか許容範囲外どころか国外来ちゃったんですけど…。

そんなことを考えた瞬間だった。

突然、その外国人が「H o o o o o o !」と奇声をあげ、バス内にジャンプ。

何回転かしたあと頭で着地した。

ゴンツという鈍い音がバス内に響く。

死んだ。

これ絶対死んだだろ。

「おい大丈夫か？」と言おうと思って彼に近付いた瞬間だった。

っていうかこいつ、俺がなんかしようとした瞬間を狙って動いてないか？

「D a n c i n g A n d R o l l i n g S t a r ! F u u u u !」

とまた奇声をあげ、頭で回転しながら松下五段の隣へいき、そこで回った。

「あれはTKだ。ちょっと変なやつだがいいやつだぞ。」

日向が説明してくれたが、俺は衝撃が強すぎて反応することはできなかった。

これが…

これがこの町ではちょっと変というレベルなのか…？

どうやら俺たちはとんでもない町に来ちゃったようだぜ…！！

そのTKの衝撃は中二病が再発してしまう程だった。

その後すぐにバスは学校に着いた。

バスを降りて日向と別れ、俺と初音はクラス発表で出来た人混みをぬって職員室へと急ぐ。

俺たちのような転校生がクラス発表みても誰と一緒にかわからないしな。

職員室で自分たちが転校生であることを説明するとそれぞれの担任のところへ案内された。

俺の担任になるらしい先生は30歳前半のどこか脱力した男だった。

「ああ、君が音無結弦くん？」

担任がけだるそうな声で聞く。

おい、お前、教師だろ？

教師が新学期早々それでいいのかよ。

なんてことをいって新学期早々嫌われるのは俺の主義に反している
ので言わないでおく。

「あ、はい。そうです」

「転校生だからって肩に力いれなくていいからね」

「はい。わかりました」

ここまでは大体転校初日によくされる話だった。

ここまでは…

「うちのクラスはメンバーがメンバーだからね」

「はい？」

「うん。運がなかったと思って頑張ってよ」

…？

どういう意味だろうか。

どういう意味なのか質問しようとした時、ちょうどチャイムがなっ
た。

「あー。チャイムなっちゃったよ…。まあいいか。朝のHRが終わってから始業式だからね。とりあえず教室いこうか」

「あ、はい」

「そーいえばいつてなかったけどクラスはC組だからね、2・Cね」
そういつて先生はダルそうに立ち上がり歩き始めた。

この時、俺がバス内で起こったことを思い出していればと思う。
しかしそれはそれで思ったとしても後の祭りだがやはり心構えくらいは出来ただろうと思う。

まあ結局何が言いたいかと言うとせめて心の準備くらいはしたかったということだ。

教室の前につく。

「んじゃここで待っててくれい。」

そういつて先生は教室の中に入っていた。

適当な挨拶を終え、お決まりの台詞が聞こえてくる。

「んー、とりあえず転校生を紹介する。んじゃ音無く入っておいで」

俺はドアに手をかける。

その瞬間、背中から嫌な汗が出た。

なにかがいつもと違う。

そんな漠然としたイメージをこのクラスから感じた。

胸騒ぎとまでは言わないがザワザワする。

別にこれは中二病を患っているわけではない。

そんなものは職員室前までで退散していただいた。

もしかして柄にもなく緊張しているのだろうか？

俺は底知れぬ不安をたちきるため首を大きくふった。

一度、拳を強く握りしめる。

よし。

もう大丈夫。

一度だけ深呼吸し、俺は勢いよくドアを開けた。

第四章〜Crazy students〜（後書き）

ここまで読んでくれてありがとうございます。

あんまり高松にふれてあげられなかったのが心残りですね。

まあ高松はそういうキャラだからいいよね!?

（高松ファンのみなさん、すみません。）

第五章 self-introduction (前書き)

5章です

話が全く進まないっすねwww

第五章 self-introduction

ガラガラと音をたてて開かれるドア。

開けたの俺だけだ。

俺は生徒を見ずに素早く黒板前へ移動する。

何故かって？

もちろんさっさと転校生恒例イベントを終わらせるためにさ。

転校してまずさせられること。

そう。

自己紹介だ。

自己紹介は嫌いだ。

特に言い終わった後の微妙な空気は何回やっても慣れない。

時々、そのあとに質問タイムなるものを設ける輩がいるがそれは本
当にやめてほしい。

こっちは質問なんてされても面白い応対なんて出来ないぞ。

だからそんな期待した目で俺を見るなああああ！！

おっと昔のトラウマが・・・

そんなトラウマが頭を過りながらも黒板に自分の名前を書いていく。

いやいつもはこんなに情緒不安定じゃないからな？

音無結弦の音無まで書いて糸に差し掛かった時だった。

突然1人の男子生徒が立ち上がり、

「あ、ワルプルギスの夜が襲いかかってきた！！」

と叫んだ。

・・・。

は？

ドラクエ？

いやいやちょっと待て。

今、転校生が自己紹介しているという、シンツとした雰囲気の中でなぜ唐突にしようもない嘘をつく？

しかもなんだ？

ワルプルギスの夜って。

まだ夜は明けたばかりだぜ？

などと考えていると下の階から

「え？嘘、じゃあ私が契約して魔法少女になるしかないじゃん！誰か！誰か白い淫獣を見ませんでしたかあゝ」

と聞き慣れた妹の声が聞こえたがそれはスルー。

そしてそのかわいそうな生徒も妹と同じようにクラスメイトからスルーをくらっていた。

いつものことだ、と言わんばかりのクラスメイト。

しょうもない嘘をついた生徒は顔がひきつっていた。

っていつかその生徒は朝、バスであった青髪の生徒、日向だった。

日向は顔をひきつらせながらゆっくりと席に座る。

まあここまでは百歩譲ってまだクラスで普通にすることができると光景だ。

いきなり叫びだすようなやつはまだクラスに一人くらいはいるだろう。

だがここからは誤解せず聞いて欲しい。

俺は嘘をついたり話を盛ったりしていないことを始めに断っておく。

俺が見たそのままの光景を描写するからな。

日向が席に座った瞬間、突如、日向の椅子が下部から火を吹き、日向は宇宙へ向けて打ち上げられた。

そしてもちろんこの教室は解放感溢れる吹き抜け教室というわけではない。

まあつまりしっかりと天井があるわけで。

日向の勢いはとどまることを知らないわけで。

宇宙どころか大気圏も突破できず、見事、頭から天井に突き刺さってしまった。

湧き上がる歓声。

弾ける笑い。

クラス内のさつきまでの雰囲気は逃げ出してしまい、クラスは完全に爆笑の渦に巻き込まれて、そのまま祭りでも始まるのではないかというくらいの勢いだった。

それにしてもかわいそうに。

完全に頭がのめり込んでしまっている。

日向の頭が天井に刺さった、というより日向の胴体が天井から生えている、って感じだった。

引っこ抜いたらマンドレイク見たいにギャーギャー言いそうだ。

いやいきなり天井にのめり込まれたらギャーギャーくらい言うか。

逆にスッキリとした顔で出てきたら気持ちが悪い。

あ、でも日向がドMだったらありえるか…

「あー、松下、高松。日向を引っこ抜け。HRが始められん。」

え？

日向のフライトについては何もないの？

アテンションプリーズものだったよ？

なんつー先生だよ。

しかも聞いたことある名前が聞こえたような…

先生の命をうけ立ち上がったのは今朝、バスであった肉うどんの妖精と眼鏡筋肉馬鹿だった。

つーか、同じクラスかよ！？

このクラスにいきなり不安覚えたよ…

まあ外人ダンサーがいないだけまし、

「Fuuuuu!!」

なんでだよ！！

なんでいるんだよ！！

なんで回ってんだよ！！

まだ日向を引っこ抜いている途中だったが先生は構わずHRを進める。

正直、落ち着く時間がほしい。

「んじゃあ音無の席、決めるぞー」

先生がダルそうに空いてる席を探す。

「先生。私の隣が空いてます」

女の子の声が教室の後方から聞こえた。

透き通る綺麗な声、でもどこかで聞いたことがあるような声だった。

「んー？おう。じゃあ立華のとなりな」

立華と呼ばれた少女に目を向ける。

あの小柄な白い髪の少女だった。

心臓が大きく脈つつのを感じた。

「ん？どうしたあ、音無。そんなに立華に見とれて…まさか立花に一目惚れでもしたか？」

冗談っぽく担任が言いクラスメイトたちはまた笑いに包まれる。

でも俺はその笑い声に怒りを覚えることはなかった。

なぜならそれもあながち間違いではなかったからだ。

たしかに俺は見とれてしまっていた。

だが別に一目見た瞬間恋に落ちたとかそういうロマンチックなことが起こった訳ではない。

また頭に映像が過つたのだ。

ここじゃない教室に白い髪の少女が座っていて、

俺はその左斜め後ろの席に座ってるんだ。

それで俺はその少女を眺めている。

そんな映像だった。

なんでもない日常の1シーン。

でもこの胸に広がる罪悪感は何だろうか。

あの少女に対してなにか悪いことをしたような気がする。

断っておくが別にナンパまがいのことじゃないぞ!!

もっと大きな…彼女を陥れるような、そんな感じの悪いことを彼女にしたような気がする。

でもやっぱり思い出せない。

やはりこれは前世の記憶なのだろうか？

それとも今流行りの別の世界線の記憶なのだろうか？

はつきりとしたことは分からないでも…

「ほーら。いつまで見とれてんだ？日向も引っこ抜かれたし、早く席につけい」

背中を黒い本みたいなの（教師がよく持ってるやつ）でポンッと押される。

てか日向のやつほぼピクミン扱いだよ…

俺、やったことないけど。

「あ、すいません」

しかし結構な時間ボーっとしてたようだ。

すでにクラスの笑い声は止まっていた。

まあ、いいか。

覚えのない罪悪感に苛まれてもいいことなんて一つもないさ。

素直に宛がわれた自分の席にむかった。

第五章〈self-introduction〉（後書き）

ここまで読んでくれてありがとうございます。

日向「それにしても天井に物理アタックは痛かったぜ…」

音無「確かに痛そうだったけど、大体お前本編でもそんな役回りだっただろ？」

日向「バツカ！イケメンシーンもあつたろうが！ほらユイのところの…」

音無「ああ、お前が『～やんよ！』連発したやつか？あれ正直、見てるこっちが痛かったぞ。もうユイも『～やんよ！』って言われすぎていらつときたから成仏したんじゃないのか？」

日向「orz」

第六章 c o n v e r s a t i o n (前書き)

6章です

会話多いwww

第六章 c o n v e r s a t i o n

とりあえず荷物を置いて座ったところで日向が話しかけてきた。

「よ、よう、転校生もとい音無。さっきは見苦しいところ見せちまったな」

日向がバツが悪そうにこちらに笑いかけてくる。

俺の席は日向の席の後ろだった。

「あ、ああ。かまわないさ。でもこの学校っていつもこんな感じなのか？」

「あー基本、何やっても許されるみたいな校風だし、変な奴も多いけど、このクラスは特別だな。なんかやたらと問題児が集まってるみたいだし。まあ問題児っつーか…」

「問題児と言うよりはSSSのメンバーが多いわね」

「うわっ」

急に耳元で話しかけられた。

しかも女子に。

「ふふふ。そんなに驚かなくていいのに。私はゆり。あなたの左隣の席に座っている可愛い女の子よ」

確かに整った顔立ちをしているが…

自分で可愛いとかいうなよ。

それよりとっても気になる単語が出たんだが…

なんだ？

SSSって。

「で、そっちのライト兄弟ばりのフライトをかましたのが日向くん」

「あ、ああ。日向とは今朝会ってるから知ってるんだ。それで…」

SSSって何？

というセリフは日向によって遮られた。

「そのフライトはお前のせいだろうがゆりっぺー！よくも俺の椅子をロケットに改造してくれたな！！おかげで思いっきり天井にめり込みしまったじゃねえか！！」

「私が改造したんじゃないわ。改造したのは科学部ギルドの連中よ」

「命じたのはお前だろうがあー！！大体、なんで俺がこんなさらしものみたいなことしなきゃなんなかったんだよ。普通、転校生の自己紹介してもっとこう、シンツとした雰囲気で行われるべきことだろ？」

「そう。私はその当たり前の価値観に一石を投じたかったのよ」

「それでなんで俺が天井に向かって投じられなきゃならなかったんだ！！」

「だってそつちの方が面白いじゃない！それにしてもあなたのギャグ、ちつとも面白くなかったわよ。打ちあげられて笑いがとれたんだから私に感謝してほしいくらいだわ」

「あー！！やっぱりお前、面白がってたんじゃないかあ！！！！今日という今日はじっくりと話あつて…」

「日向くん。うるさいわ。今はHR中だから静かに」

俺越しに日向とゆりの会話劇を注意する俺の右隣の少女。

そついえば忘れていたが俺の右隣にはあの白い髪の少女がいたのだつた。

確か立華と呼ばれていたな…

「そつよ、日向くん。あなた、とてもうるさいわ。先生の話中は喋らないって小学校で習わなかったの？先生の顔が見てみたいわ」

「俺たち、小中高全部一緒だろうが！！」

「あら、そうだったかしら？昔の事は忘れたわ」

「高校は今だろうが！！忘れんな！かなでちゃんもなんか言ってやれ！」

「だから日向くん。静かに」

「かなでちゃん!？」

日向はあんまり立華に好かれていないようだ。

「ところで音無くん。彼女は立華かなでちゃん。このクラスの学級委員よ」

このタイミング!？

すげータイミングで紹介ぶちこんできたな…。

「あ、あのよろしく」

とりあえずあいさつ。

「よろしく」

俺のあいさつに反応すると立華はまた前を向いた。

よかった。

普通に返してくれた。

正直、ナンパまがいの件をここでカミングアウトされたらどうしようかと思っていたところだ。

「そつえば、音無くん。かなでちゃんのこと、ナンパしたって本

当？」

「はぁ！？何故それを！！」

すでに暴露済み！？

「音無くんが教室に入ってきた時、かなでちゃんがボソツと言ったのよ。『あ、駅でナンパしてきた人だ』って。やっぱり本当だったの。そういう風に見えないけど意外とやるのね」

「違う！！あれは…！」

「あれは？」

「あれは…あれは…あーえー…」

いい言い訳が思い浮かばなかった。

これじゃ本当にしました、と言ってるようなものだ。

「いいわよ、別に言い訳しなくても。別に怒ってるわけじゃないから」

いや、例え俺が本当にナンパしてても何故お前に怒られなきゃならないんだ。

「ナンパに必要なのはなにかわかる？」

急になんだよ。

しらねーよ。

「ナンパに必要なのは運、努力、勝利よ」

聞いてねーよ。

そして明らかに後者二つは某雑誌から持ってきたる。

「あなたはそう、二つを手をしている。そう、運と努力ね」

努力してねーし運もねーよ。

ただみじめな思いしただけだったし。

大体ナンパなんてして……ないとは言いきれなかった。

「私、その二つって学園生活を有意義に過ごすためにはとっても大事なモノだと思うの」

おいおい話の展開が全く見えないぞ……？

「おい、まさかゆりっぺ…!？」

日向が驚愕の色を顔に浮かべる。

「だからあなた、私のSSSに入りなさい!!」

だからSSSってなんだ――！！！！！！

第六章 c o n v e r s a t i o n (後書き)

ここまで読んでくれてありがとうございます。

会話多っ

と思った人がほとんどだと思います。

いやゝゆりっぺが出るとよくしゃべるwww

そのおかげで音無くんの妄想シーンもほとんどないですねwww

ところでSSS…なんの略でしょうねwww

S…正直

S…少し

S…章の名前考えんのめんどい

かもしれませんwww

第七章 entrance of gym~~~(前書き)

7章です

早いものですね…

まあゆっくりと頑張っていきますんで応援よろしく！

第七章 entrance of gym

「だからSSSって…」

「そこーうるせーぞー。さっそく転校生と仲良くなるのはいいことだが、先生の身にもなってくれい」

俺がSSSについて聞こうとすると先生によって遮られてしまった。

「はい」

ゆりと日向が同時に返事をする。

この息の合い方…

さすがは幼馴染だ。

しかしまたSSSについて聞きそびれてしまった。

こう何度もSSSについての説明を遮られると何か凄い闇組織ではないか、と勘繰りたくなってしまうのはまた中2病を発症しているからなのだろうか？

「んじゃまあボチボチ、体育館に移動してくれい。始業式に遅れたら俺がどやされるからなあ…」

担任の一言で生徒たちは体育館に向かい始める。

もちろん俺も転校早々、不良扱いはされなくなかったので体育館に向かうことにした。

この人ばかりについていけば体育館にはつくだろう。

「おい、音無、俺を置いてくなよ」

廊下の途中で日向が後ろから追いかけてきた。

「ん、日向か。」

「おいおい、もう友達なんだからさ、待ってくれてもいいじゃんかよ」

日向があの子達同士がよくやると言われる、肩を組む、という行為を行ってきた。

なぜ仰々しく説明したかと言うとそうやって肩を組まれたのは初めてだったからだ。

転校が多いと他人にも近づいていけなくなる。

転勤族の子供によくある現象だ…

俺だけかも知れんが。

「あ、ああ、悪い。」

「おいおい、謝らないでくれよ」

「あ、ああ」

さっそく友達が出来てしまった。

きつと僕は友達が少ない状態になると思っていたので正直、ちょっと嬉しい。

ちなみに僕は友達が少ない状態はハーレム状態の事じゃないぞ!!

そっちならなりてえ…

まずは隣人部のポスターから探すか。

斜め読みだったよな…

…いやそんなことをしている場合ではない。

「ところでさ、SSSって何なんだ？」

とりあえずさっきの疑問を解決するべく日向に問いかける。

「ん？ああ。SSSっていうのはこの学校にある部活みたいなものだよ。」

部活？

ゆりは部活の勧誘で俺を誘ったのか。

てっきり何らかの闇組織かと思ったぜ。

そっちの方が面白かったのに。

「この学校って部活動強制参加ってわけじゃないけどほとんどの生徒が部活動に入ってるな。結構、部活動対抗戦とかあるし…あ、ちなみに俺もSSSのメンバーだからな」

新入生を除けば、転校生ぐらいしか部活に入っていない生徒がいな
いということか。

なるほどだから俺を部活動に勧誘してきたのか。

だが悪いな、日向。

俺はもう隣人部に入るって決めて、

「あ、ちなみに隣人部はないからな」

なんだコイツ!?

読心術でも使えるのか?

畜生!!俺の楽園が!!
ハレム

「だからさ、お前もSSS入れよ。このクラス生徒、ほぼSSSのメンバーだし、SSS来ればすぐにクラスに打ち解けれること間違いないだぜ?」

日向はこれ以上ないくらいの笑顔で俺に笑いかけてきた。

確かに早くクラスに馴染みたいという気持ちはある。

でも俺はまたいつ転校するかわからない身だ…

部活に入って妙な未錬を残して去るのだけはしたくなかった。

……断ろう。

その方がいい。

お互いのためにも。

別に部活に入らないからって日向と友達でいられなくなるわけじゃないんだ。

だから…

だから…

「考え…とくよ」

言えなかった。
断れなかった。
謝れなかった。

答えを引き伸ばすだけ辛くなるのに。

断ればきっと日向は少なからずショックを受けるだろう。

俺はこの笑顔を壊すことが出来なかった。

折角出来た新しい友達にそんなことはできない。

「おう。なるべく早く決めろよ。入るなら早いに越したことはないからな」

そついつて日向はまた笑いかけてくる。

そんな笑顔されたらますます断りにくいじゃないか…

そのあとは日向と他愛もない話をしながら体育館へと向かった。

体育館では先に入学式が行われている。

よつて俺たち在校生は外で待機するはめとなっていた。

一応、クラスごとに並んでいるようだが俺のクラスはやりたい放題の荒れ放題だった。

肉うどん食ってる奴、筋トレに余念がない奴、ひたすら踊ってる奴、PC使ってる奴…

日向がトイレにいつてしまったので俺は一人でその荒れ放題な様を見つめる。

やれやれ。

こんな慌ただしいクラスでこの1年は過ごすのか。

先が思いやられる。

そういえば立華の姿が見えないが…どうしたのだろうか。

「おい、転校生」

急にうしろから俺に話しかけてくる野太い声があった。

「ん？何か用…」

と振り返った瞬間だった。

いきなり胸倉を掴まれ、グイッと顔を近づけられる。

「お前…ゆりっぺと何やら親しげに喋っていたな」

へ？

俺の目の前にあるいかにも悪そうな顔が睨みを利かせてくる。

トゥットゥルー

おとなしのぼつぎよりよくがさがった！



おとなしはどうする？

1、たたかう

2、言いくるめる

3、助けをよぶ

4、にげる

いやこういう奴に限って話すといいやつだった、とかいうオチが多

いんだ。

きつとそうなんだ。

筋肉眼鏡馬鹿の高松の例を思い出せ。

あいつは一見、天才眼鏡クールキャラだったがその実、究極の肉体美を持ちさらには馬鹿だったではないか！！

とりあえず話してみよう。

まずは誤解を解かなくては…

「い、いや、親しげというか、何というか、ただあいさつしただけですよ？」

「あんなに仲良さそうに喋ってたじゃねえか！！しかも…ナ、ナンパとかいう単語が聞こえたんだがそれは俺の聞き間違えだったってのかあ！！ああ！？」

ちよ、顔近いんですが、顔につばがかかりまくってるんですが！！

「当たり前だろうがこのバカ」

スツと後ろから日向が現れる。

ハンカチで手を拭きながら登場って意外とかつこ悪いな、なんて思わなかった。

断じて！！

このつばシャワーから助け出してくれる奴だったら誰でもかっこいいさー!!

「な！？日向、てめえ俺のこと今、バカって言ったな！！この…」

俺の制服から手を離し、日向に詰め寄る。

「おいおいいいのか、野田？…唱えちまうぜ？」

「な、何をだよ？」

たじろぐ野田と呼ばれる男。

「わかってるんだろ？」

今度は日向が野田に近づいていった。

「だから何をだよ！！」

そう強がる野田の額には多くの汗が光っていた。

これが世に言う冷や汗なのだろうか？

それほど日向が今から唱えるそれは強力なのだろう。

きつとイオナズンレベルだ。

前にいた学校の奴も男は黙ってイオナズンって言ってたもんな！

3
1
4
1
5
9
2
6
6
5
3
5
8
9
9
7
9
3
.....

「ってこれ、ただの円周率じゃねーか!!!」

そんなんでこのいかにも悪そうな男改め野田が怖がるわけ、

[illegible]

走り去っていく野田。

い
ち
い
ち
い
ち
い
ち
!
!

円周率で逃げていくいかにも悪そうな男ってシユールすぎるよ!!

円周率にはイオナズンはもちろんお経的な能力もないんだぞ？

脱兎のごとく逃げていく野田の後ろ姿を眺めながら俺はあんなやつに気押されていたのか、と落胆する。

「今の奴は野田。顔と違つて悪い奴じゃないんだ。許してやってくれ。あいつのゆりっぺ好きと頭の悪さは筋金入りだから……」

ここで日向先生から野田の説明が入る。

いや頭悪いからって円周率を言っただけで逃げ出すってどんだけだよ。

「だからあいつ俺に突っかかってきたのか……ってええ！？あいつ、あのゆりの事が好きなのか！？」

「ああ。確か昔助けられたとか何とかで…あいつ、ゆりっぺのためなら命だつて投げ出すぜ？それくらいレベルで好きなんだよ、ゆりっぺのこと。もはや宗教レベルだな」

おそろしいよ！

この歳から宗教レベルで好きってどんな助けられ方したんだよ…

いや恋に年齢なんて関係ないのさ、とかいうやつなのだろうか？

「そうなのか…確かにゆり、顔はきれいだし、モテそうだけど…」

「え？何？まさかお前もゆりっぺに惚れちゃったのか？」

「いやちげーよ！！俺はどちらかと言うと小さくてかわいい子の方が好きだ！！！」

「え、音無、お前つて変態ロリコンなのか？」

「違う！！身長が、て意味だ！！！！小さい方がかわいらしいじゃねえか！！そして変態とかいてロリコンと読むな！！！」

「音無…最近、規制とかきびしいから気をつけろよ。頼むからこの小説にR18のタグをつけさせないでくれ…」

「だから違うつていつてんだろ！！！」

あーだこーだ言っじゃあっている間に在校生の入場の時間になる

やがて体育館のドアが開かれ、在校生の入場が始まった。

第七章 entrance of gym~~~(後書き)

音無「お前さ、円周率で退散する役ってどうよ？」

野田「いやあれだけ数字言われたら普通はあんな感じになるだろ。お前らがおかしいんだ」

音無「それじゃあさお前、何桁の数字まで計算出来るの？まさか3ケタの計算も出来ないとかないよな？」

野田「待った3回までなら4の段まで言えるぞ」

音無「お前、高校、絶対裏口入学だろ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6827x/>

Alive Beats!

2011年10月23日17時09分発行